

青木 健
伊藤氏賞
勝又浩
佐藤洋一郎
津村節子
富岡幸一郎
中沢けい
松本 徹

編集
吉田知子「下カシ」
吉村萬志「異変」
インタビュー 澤田隆治
テレビの誕生とお笑い(前編)
聞き手・伊藤氏賞
追悼・松本道介

季刊 文科

72

第九回小島信夫文学賞発表

新シリーズ・我が生涯の記

高橋三子編 中沢けい

文科

津村節子 萩原朝美
中上紀 谷村順一



同人雑誌季評

不在と喪失

谷村順一

今回はまず太平洋戦争を扱った作品を二つ紹介したい。下平尾哲「積乱雲」(「くれす」第12号 京都市)は、主人公の岩崎と同僚である牧の、脱走兵岡部をめぐる追跡劇、なのだが、脱走と追跡、というキーワードから連想される緊迫感はやや希薄で、むしろ全体的にどこかのどかな雰囲気がある。それはたとえば足に故障を抱えた岩崎、そして肺結核の既往歴がある牧という、およそ脱走兵の探索、追跡、補足という困難な任務に向いていないふたりが追っ手ということもあるし、岩崎に軟派を指摘された牧が、「軟派が悪いか。この戦争が終わったら世の中は変わってオレのような男が普通になる。日本が欧米先進国と同じになるということだ」と心え、岩崎もそれに反論でき

を後世に受け継ぐ必要があつて、小説が担うべきその役割について考えさせられた。

同誌からもう一作、奥田寿子「楓」を取り上げたい。本作は内縁の夫の中学生になる娘楓と同居をしななければならなくなった主人公綾乃の戸惑いを描いているのだが、ではどうして綾乃が楓と同居することになったのかというと、楓が東日本大震災の被災者で、大津波によって母親と祖母の行方がわからなくなったから。友人の操に言わせれば、「入籍してないんやから、ラッキー」で、「さつさと逃げ出したらいいやん。まだ若いんやもん。何もかも背負うことはな」く、綾乃にとつても逃げ出せるのであれば逃げ出したところではある。しかし「今は何処でもあたりまえに救済、救済って被災地に向けて人の善意が取りざたされて」いて、だからそんなときに「私だけ逃げるなんてそんな勇氣」はなく、むしろ

ない程度には日本の敗戦が近いことに気付いているということも大きく関係しているかもしれない。ふたりにとつてはすでに戦争は終局を迎えていて、だからと引き延ばされた終戦までの日々をやり過ごす日々に起きたのが、この脱走兵追跡劇なのだ。程なくしてふたりは岡部との接触に成功する。そして岡部の口から脱走の理由を聞き、なぜ上官の志水が岡部の追跡を自分たちに命じたのか、その本当の理由に気付くことになるのだが、戦争という大きな時代のおねりの中で、兵士もまたひとり人間である、ということにあらためて気づかせてくれる佳品である。

住田真理子「杭を立てるひと」(「あらかいど」61号 大阪市)は、当時豊川海軍工廠書記官だった杉浦泰蔵の視点でもつて、豊川空襲の惨状を生々しく描き出す。タイトルにある「杭」とは、杉浦の上司である工場長が、焼け野原となった工場敷地内

差し伸べた手を引つ込めれば、自身の身の置き場がなくなってしまう、とさえ考えている。震災後、「絆」や「がんばろう日本」といったことが街のあちこちに溢れたが、口当たりのいいことが繰り返されることで、個人の主義主張はそれらとすり替えられていき、思考停止に陥るはめになる。集団を操るにはもつてこい的手段。吉村萬志が「ポラード病」でディストピアを描き出したのは、まさにこうした同調圧力、全体主義へのカウンターなのだが、その点でいえば綾乃もまた同調圧力に屈したひとりなのだ。もちろん、そういつてしまつては身もふたもない。綾乃は夫との仲を維持するために、楓との関係を築こうと努力をする。被災者である楓を綾乃は腫れ物に触るように扱ひ、楓もまた自身を被災者として意識する。そんなある日、綾乃は震災直後の被災地を写した写真展の会場に足を向ける。流された

で、空襲の最中に自分がどこにいたのかを上層部に示すために、杉浦に立てさせた目印で、つまり工場長が自身の面子を保つためのもの以外の何ものでもない。なにより、工場長にとつて大切なのは奉安庫の納められたご真影の状態であつて、奉安庫の火元責任者である杉浦から無事の報告を受けると満面の笑みを浮かべる。しかし砲弾の破片によつて腹を切り裂かれ息絶えた同僚の田村や、すでに虫の息となった部下の衣江の姿を目の当たりにしていた杉浦にとつて、命を落とした数多くの工員たちと、ご真影の価値を比べられるはずもない。毎朝欠かさず祈りを捧げていた豊川稲荷のご利益も、工廠神社のご加護もなかった。生き残った杉浦は、だから死んだ同僚の最期の場所に細い杭を立て、死者がそこに確かに存在していたことを刻みつけるのである。いつまでも「戦後」であり続けるためには、戦争の記憶

橋げた。切断された棧橋。打ち上げられた船。陽の射さないモノクロの世界。そして毛布にくるまりたずむひとりの少女が楓であることに気付くと、「楓の体温が伝わってくるのを感じ」じ、「身体が震えて、心が揺すぶられ」はじめ。やがてその少女だけではなく、写真に写し出された被災者すべてが楓に見えてくるのだが、テレビをはじめ多くのメディアで目にした被災地や被災者の映像を、文字によつて十分に再現するには、すこしこの場面のポリウムが足りないかもしれない。

葉山ほずみ「ホームタウン」(「八月の群れ」vol.64 兵庫県)は、制御不能になった某国の宇宙ステーション『天子』が地上に落下することによつて、住む場所を失うことになるかもしれない男子高校生つばさと、母親から強い性的虐待から逃れるため、街を離れることになったクラスメートまどかとの